

国家戦略特区ワーキンググループ有識者等からの「集中ヒアリング」 (議事概要)

(開催要領)

日時 平成 25 年 7 月 19 日 (金) 14:30～15:20

場所 永田町合同庁舎 7 階 特別会議室

出席

<有識者>

座長 八田 達夫 大阪大学社会経済研究所 招聘教授

委員 原 英史 株式会社政策工房 代表取締役社長

<ヒアリング対象者>

中上 英俊 (株)住環境計画研究所代表取締役会長

<事務局>

加藤 利男 内閣官房地域活性化統合事務局 局長

富屋 誠一郎 内閣官房地域活性化統合事務局 局長代理 ほか

(配付資料)

- 有識者等からの提出資料
-

(議事概要)

○藤原参事官 住環境計画研究所の代表取締役会長でいらっしゃいます中上英俊先生からお話を伺いたい。

本ヒアリングは、全体として50分間とし、最初30分くらいを目途にお話をいただき、その後、質疑応答と意見交換を行う。

資料と議事は原則公開とさせていただきます。

今回の趣旨だが、これまでの構造改革特区、総合特区が自治体及び事業者の手挙げ方式で提案があり、選定されているのに対して、今回の国家戦略特区は、国が主導してプロジェクト、規制改革事項などを地域と一緒に実現していくような運びとなっている。そのためプロジェクトや規制改革事項のアイデアをまずは有識者の方々から伺うというものである。

○原委員 1点だけ補足すると、この国家戦略特区の話は、もともと産業競争力会議の場で提案がなされて、今、実行に向けてということになっている。

もともとの競争力会議の議論の中で、一つの提案として、例えば特区の中限定で標準時

の設定などについても変えるということを検討してみてもどうかという話もあったので、今日はそのようなことも含めたお話をいただけたらということをお願いする。

○中上氏 今日2つ資料を用意したが、私自身はこのサマータイム制度の勉強会に役所からお声がかかってやり始めて23年目ぐらいだと思う。付録でお付けしたのが18年と書いてある。あれからもう既に5年ぐらい経っているんで23年、間もなく四半世紀で、もうほとんど諦めかけていたのだが、ぜひこのような機会ですら少し御検討いただければと思う。

なぜサマータイムかという話なのだが、2ページをめくっていただくと、夏の一定期間、時刻を進めて、明るい時間帯を利用しようということで、海外では「デイライト・セービング・タイム」という言い方もするが、日本ではもっぱら「サマータイム」と言っている。

いずれにしても、この問題の研究会が始まったのは、省エネ、地球環境問題、地球温暖化防止について、いろいろな形でCO₂削減に寄与できるものはないかということで、個別の技術について、御案内のとおりいろいろなものが検討され、あるいは制度として走っているわけではあるが、当時から言われている社会システムというか、社会制度として何かそういうものはないだろうかということがある。社会制度というのは言葉が広いので、いろいろあるが、当時いろいろな方々と何かないだろうかを探していると、唯一このサマータイム制度ぐらいだと、省エネということともタイムリーに合うのではないかとということで、本格的に研究することになった。

これも御案内のとおり、西欧、ヨーロッパ、アメリカでは、第一次世界大戦ごろから進められている。もともと目的は資源エネルギーの節約。要するに、当時の世相であるので、明るい時間帯を有効に活用することによって、照明用のエネルギーというのは電気でも基幹のエネルギー需要の一つであるから、それをセービングするというで始まった。長い歴史を持っている。

3ページをめくっていただくと絵が書いてある。模式的に見ると、1時間ずらすとはどういうことかということを表わしている。よく誤解なき向きがあって、確かに時刻を早めたときは、切りかえたときには夜が1時間短くなるわけだが、それは寝不足になると言われて、ずっと毎日寝不足になるわけではないと、いくら御説明してもわかっていただけない。これが往生する。

私も困りに困って、海外に行かれたときに時差がある。あれはこのようなものではない時差だが、時差は1週間したら慣れる。7時間も8時間もかかるから1週間かかるので、1時間だと大丈夫だと言っても、寝不足になって、子供が寝つかない何だと言われて非常に苦労している。逆に戻るときは1時間長くなるというのは全然見てくれない。なかなか人を説得するというのは難しい。

4ページを見ていただくと、世界70カ国以上で導入されている。

これはもう御案内のとおりであるが、普通こういう新しい制度を入れようとする、前例があるかとか、ほか他はやっているかと必ず聞かれるが、これだけやっている。何もほかの国がやっているからやる必要はないではないかと、またこういう反論が来るのだが、

どちらに行ったとしても反対され、非常に苦勞した。

お隣の韓国と中国はやめている。どこかで出てくるかもしれないが、中国もこの広大な敷地の中で一度サマータイムをやっている。経度の関係からいくと、この国は西の端と東の端ぐらいで大体4時間ぐらい時差がある。それが今は北京だけで時制が決まっているので、もともと西と東ではものすごい時間のずれがある。よって、アメリカ大陸と同じぐらいの幅があるのに、時間が1個しかないと考えていただいてよいわけであって、この国が一時期サマータイムを入れた。これは笑い話だが、西のほうはたまったものではなくて、これもおつけした文章には書いてあるが、私の九州大学の友人が現地の環境調査に行っていて、3時ごろになったら、こうこうと日は照っているが、もう6時だから帰ろうと言われた。せっかくここまで来たのだからもったいないから実測して帰ろうと言って、6時過ぎまで実測して帰ったら、もう現地時間が10時近くになって、晩飯がないぞと言われた。明るいのにどうしてかと言ったら、時間は時間だと言われて、えらい大変な目に遭ったと言うので、あの国でやはりサマータイムは大変だねということを知ったのを非常に鮮明に覚えている。

お隣の韓国は、オリンピックのときに導入された。これはいろいろな理由があったと聞いているが、本音のところは、当時のテレビネットワークで世界的に中継するのに1時間でも欧米に近づけたほうがゴールデンタイムに近いということで決めたように聞いている。本当のところはわからないが、そう聞いている。ただ、これはオリンピックが終わったらすぐにやめてしまった。

ところが、これも後で出てくるかもしれないが、韓国の標準時は日本と同じである。よって、明石にある。日本の標準時が明石にあるというのは、ちょうど東経135度に当たっている。15度で1時間なので、ちょうど時制に合う地点が日本の中にあつたことになる1時間早めると、国後、択捉の辺りに行ってしまう。1時間遅くすると今度は北京の辺りに行ってしまう。したがって、韓国は自分の国の中にぴったりした時制の経度が通っていない。したがって、時制を決めるときに西に決めてしまったのでは、何か全く太陽の動きに逆行することになるので、東の日本を選んだ。ということは、韓国の場合には、30分から1時間ぐらい、通年でサマータイムをやっているようなことになる。

よって、そのように国の違いがあるということで、日本の場合には、幸か不幸か、ちょうど真ん中を通っているのだから、東西に長い北海道と九州だと、ここでまたもう既に1時間ぐらいの時差が生じてしまうということになる。

5ページを開けていただくと、サマータイム制度導入の時代背景とある。

これもいろいろなことを全部調べて、みんなにアナウンスしなければいけないのだが、あれこれ調べてみた。

江戸時代は御案内のとおり、子の刻とか丑三つ時とかいろいろあって「自然時間」で、日中に明るい時間帯を等分して、夏の場合には昼間の1時間が非常に長い。冬になると短くなるという、まさに日の出、日の入りとともに生活をしてきたという不定時である。

それが明治6年に「定時制」というものが導入されたそう。このときの主務官庁は覚えていないが、どこかがあって、これを決めた。あとはもうこれを主管する官庁が日本の中にない。それが非常に厄介で、サマータイムをやろうといったときに、どこに主務をつかさどっていただくかということ特定できない。この問題は、とりあえずは最初、通商産業省で始めましたので、通商産業省で全部事務をやっていたが、その後、何度かの見直しのときには環境省や、経済産業省、気象庁に入っていて、関連する各省庁の方々に来てやっていただくということで議論したのだが、どなたも自分のところの仕事のmatterではないので、何となくいまいち乗りが悪く、悔しい思いをした

実は、これも御案内かと思うが、終戦直後の昭和23年から27年、サマータイムが日本でも導入されていた。私は昭和20年生まれなので、覚えているはずなのに、全然この辺は覚えていない。先生は覚えていらっしゃるか

○八田座長 私は覚えている。当時は「サンマータイム」と言っていた。

○中上氏 サンマータイムと言っていたが、これは米軍の命令によって導入された。目的は電力、石炭の重要資源の節約ということ。もう一つには国民保健の増進に寄与するのだという名目で始まった。しかし、4年、5年でやめてしまった。

やめた理由はまた後で紹介するが、いろいろなプラスマイナスの報告がある。

しばらくの間、その後は全く本件については取り沙汰されなかったが、1979年、第2次オイルショックで省エネルギー・省エネルギー資源対策推進会議が立ち上がり、その中でサマータイムも省エネ・省資源のために検討したらどうかということで検討が再開された。

1980年に、当時の総理府でやっていただいたアンケートを見ると、賛成が42%、反対が35%、わからないという回答が23%ということで、賛成が過半数に至っていないということで、とりあえずペンディングとなった。

以降、いくつかの審議会あるいは政府の委員会等々で本件は検討されているが、そこでは1988年には当時の経済企画庁の経済審議会で検討されて、1989年には夏期の省エネルギー対策として導入された。

6 ページをめくっていただいて、1990年の国民生活審議会で報告書の中に明示的に盛り込まれた、あるいは総合資源エネルギー調査会の報告書、「地球温暖化防止行動計画」等々で、何回もこのサマータイム制度の導入について、導入が検討された。多分、私が参加して検討し始めたのは、1990年ごろの総合資源エネルギー調査会のことだったかと思う。地球温暖化防止計画にも非常によいのではないかと言われた。ここでまた90年代にアンケートをとったところ、賛成がやや引込み35%、反対は同じような比率で、わからないという回答が増えた。

1992年の新経済計画の中でも世論調査をやっていただいて、その結果、やや盛り返したが、似たような結果で過半に至らず実施踏み切りにまで至らなかった。

1993年に、当時の通商産業省の資源エネルギー庁長官の私的諮問機関として「サマータイム制度懇談会」が設置されて、ここで原委員と御一緒した。

次に、1993年の総合エネルギー調査会の中間報告の中に、サマータイムは効果があるのでやるべきではないかということを書いた覚えがある。

さらに「サマータイム制度に関する調査報告書」として、社会制度導入に関する調査研究という名前で立ち上げた。このときに多分、当時の通商産業省、環境庁、経済企画庁の1省2庁で合同の研究会が再編成され、茅先生が委員長、木元教子さんが副委員長か何かおやりになって、私がいろいろな取りまとめをお手伝いしたと思う。

それで最終的には「サマータイム制度懇談会」の報告書を出した。

それを受け、結局、担当の省庁がないので、議員立法でいかなければいけないのではないかということになった。戦略を少し立て、1995年に参議院にサマータイム制度研究議員連盟をつくった。

また同じように世論調査を行ったが、もう少しのところで賛成が過半に至らなかった。

1998年になると、やっと賛成が過半に行ったが、なかなかうまくいかない。これはある意味では、一連のこのような活動を議員の方々とも何回も打ち合わせをしながら検討会をしたが、応援団がなかなかつかなかった。

以降、次のページも同じようなことを書いているので略すが、これほど何回にもわたって検討会をやった。全てに私は関係して、大体想定問答は頭の中にでき上がっている。何を言われても大体答えられるようになった。多分、今日配布した別添は、サマータイムの議連ができたというのは、平沼さんが当時まだ自民党で、やっとここで幅広く検討していただけるから、賛成も多いからうまくいくのではないかと思ったのだが、そのままペンディングになってしまっている。ぜひこの問題をもう一回検討していただきたい。

少し復習になるが、夏時刻、要するにサマータイムが入ったとき、当時、日本で初めて導入されたときにどのような反響があったか。これは時代背景があるので、今と比べるべきものがないところもあるが、省エネについては電力の節約。期間中で石炭換算6万6,000トン。今から考えれば大した数字ではないが、当時にしたら、それなりの省エネ効果が出たということである。

次に、国民生活への影響だが、主婦の方々は労働過重で夜は睡眠不足。当時のことなので、裸電球1つ家の中にあるかという生活だろうから、明るい時間があれば針仕事があるし、何もあるしということで、つつい労働が過重になった。何となく私の小さいころの母親の行動などを思い起こすと、あり得る話かなと思う。

次に飲食店について、喫茶店、飲食店、カフェなどは、カフェというのはいわゆるバーのことだが、例年の夏より客足が減って悲鳴が上がったと。やはりこのころでも、明るいとなかなか飲むわけにはいかないというのは、時代を問わずあるようで、このような話をしたら、この検討をしているときに関連の業界の方から、そら見ろと。産業に悪影響ではないかと言われて、どなたか委員の方が、新しいお酒の飲み方をまたデザインすればいいと言われて、若い人はワインを飲む。ワインは明るい下で飲んだらいいのではないかと何か言って、ああだこうだと言ったことを思い起こしますが、やはり当時でも明るいと飲

み客は減ったそうだ。

次、教員の方々は、明るいので残業が多くなって、労働が過重だと。

次に、これは当時の世相だろうが、夜学生。昼間働いて、夜学校に通っている、今の塾ではない。本当に学校で勉強するので、サマータイムは大歓迎で、当時で言うと十数万の賛成投書が来たそうだ。明るい時間帯に学校に行けるとするのは非常にいいのだとポジティブに訴えてくださったそうだ。

当時の労働省がちょうどそのときに調査された結果で見ると、賛成が35%、反対が15%、どちらでもよいという回答が50%ということだったそうだ。

労働が強化になったということをよく言われるが、これも数字なので、後から見ればこうだったということになるのかもしれないが、そこに書いてあるように、グラフで22年から35年まで書いてあって、労働時間が出ている。サマータイムを実施したのが太い矢印で下に書いてある23年から27年なのだが、終戦直後でやや労働時間は減ったが、24年からにわかには労働時間がぐっと伸びた。これはちょうど朝鮮戦争があって特需が発生したので、その影響が非常に大きかったのではないかとされる。調べてみると、そのような社会背景が当時重なっていた。

そのようなこともあり、サマータイムをやったから労働時間が伸びたのだと使おうと思えば使えなくもない。そう言われてしまうということで、このグラフをどう読むかということだが、我々から見れば、特需が起きたのだから、労働時間は当然増えたでしょうねということで、サマータイムのせいだけではないのではないかと言いたい。そのような情報もここにある。

11ページにあって、「夏時刻法」導入時と現代の相違について。経済環境は、戦後復興ということと、経済大国。今や経済大国にやや陰りが出ているから、また違うのだろうが、これに今のエネルギー問題を重ね合わせると、全く違う評価軸があり得ると思う。エネルギー問題と地球環境問題の深刻化と省エネと書いてあるが、これにさらに今の日本の電力の需給の状況を考えると、夏時刻は明るい時間を有効に活用する。もっぱら照明がターゲットであるが、照明も全て電気であるから、今、燃料電池と違ってガスからも電気はできるが、ほとんど全て電力会社が送っている電気なので、そのような意味では、この問題を重ね合わせるとまた違った読み方ができることになるかもしれない

労働時間環境も昔の二千数百時間から1,800時間。直近数年はリーマンショックもあり、その影響からも時間が減っているところはあるが、生活時間の多様化、労働組合の方々も組合によっては、ぜひ今後のことを契機に労働時間の過重な、サービス産業みたいなものを見直すようなきっかけにしたいとおっしゃってくださる金属労協のような方もいらっしゃるわけで、とにかく労働時間が伸びてしまう、サービス残業が増えるということは必ず苦情が来るので、私は開き直って、その問題は労働慣行の問題だから、サマータイムに押しつけられても困るのだと言って、随分議論した覚えがあるが、そういった議論をしているうちに、金属労協のようなところは、確かにそうだから、少し組合員といろいろ話して

みるといっていろいろやっていただいたら、結構サマータイムもいいのではないのということを書いてくださった大手の産業組合もあった。

生活余暇スタイル、価値観だが、環境問題の意識の広がり、当時この議論をしたときには、もっぱらこれが焦点だった。加えて今だと、電力需給のひっ迫という問題も入るのかもしれない。それから、生活余暇自体を楽しもうとするスタイルがそろそろ日本でも出てきたのではなかろうかと思う。

身近なライフスタイルの変革が地域社会を再生する可能性があるのだと。

これで思い出すのは、いろいろな方々と議論したが、アメリカのタレントの弁護士のケント・ギルバートさんも一緒に検討会などに入ってもらってやったが、明るい時間が増えるから、夕方、子供たちが遊んだり、スポーツをやる機会が増えるので、そのようなこと役立つのではないかと言ったら、そのようなことをやったって、スポーツ施設も完備していないし、公園の施設もない。そのような環境ができていないのだから、子供たちのスポーツに寄与しないのだと言われた。そのときにケント・ギルバートさんがおっしゃったのは、アメリカでも入れたときにはなかったと。しかし、明るい時間が増えたので、父親としては子供を連れて公園に行くのだが、みんな何となく手持無沙汰になってしまって、話しているうちに、サッカー施設があったほうがいいのではないかとか、野球をやったらどうかとあって、逆にそれをきっかけにして自治体なり、当該所管の管轄のところに申し入れをして、いろいろなスポーツ施設ができてきたという経緯がある。自分もそういう経験をしたし、父親もそう言っていたと彼らは言っていたが、日本人の場合は物が無いからだめだと言う。これをきっかけにつくればよいわけなので、そのように返答した覚えがある

次だが、当然このサマータイムの導入は、省エネルギーが目的だ。省エネの効果を試算しろと言われ、我々が試算したわけだが、これは非常に往生した。家庭用の照明事情がどうなのかということは、24時間の家庭の電力の時間別の電力消費量の推移があり、それを1時間ずらしたらどうなるかとか、広告用のネオン照明なども電力消費のデータにはないので、これをどうやってやったかという、ネオン管の出荷量を取って、寿命を聞き、今、年間そのぐらい出ているということは、寿命から考えたらストックでどのぐらいありそうだということを踏まえ、それで粗々計算した。広告の看板もそうで、広告の照明はネオン照明ではなく、中に主に蛍光灯が入っている。防水型の蛍光灯というのがあるそうで、外につけるので防水型でないとすぐに漏電して火事になったりするもので、防水型になっている。これはほとんど全てが広告用だろうということで、寿命と出荷量をいろいろなところでヒアリングして計算したり、同じような広告ネオンでもパチンコ屋などは営業時間帯は昼でもつけっぱなしにしているので、これは計算できないとか、ああでもないこうでもないやりながら、取れるところは取ってみて、多分積み残しがあると思うが、このように計算ができた。

三角になっているところが、明るい時間が増えたことによる省エネになる。三角がついていないところ、例えば家庭用の冷房需要は増エネになる。これはまだ昼の明るい時間帯

というか、5時が4時になるので、まだ日が高い時間帯に家に帰る確率が高くなる。そうすると家に帰って冷房する時間が増えるだろうと考え、その分を計算しなければいけないということで、これもえっちらおっちら計算した。年々増えてきているのは、冷房の普及率が非常に高くなったので、増えてきている。それが増エネとなっている。そのような意味では、きめの細かいところでは、北海道、東北の暖房需要が若干減るのではなかろうかという話もあった。

この中で業務用の照明需要でオフィスビルが全然入っていない。これも御案内のとおり、オフィスビルは役所も同じだと思うが、始業と同時に全部つけてしまうということになるので、明るい時間が増えたからといって、内部の照明用の電力が減るということはあまり期待できないとなった。それも本当はこれをきっかけにして、家庭でこうやっているのだから、オフィスでもそういうふうにするべきではないか。例えば窓際の照明は自動的に省エネモードになるようにすれば、相当稼げるはずなのだが、そこまで計算していくと、いろいろな過程が多過ぎるのでやめましょうということになった。考え方によっては、オフィスビルの照明というのはかなり過剰になっている。今回3.11があり、照明がえらく無駄だったということが図らずも露呈された。多分あれはサマータイムでなくても効果が今、上がっていると思う。

主に照明需要でやってみると、合計でざっくり言って90万kLぐらい原油換算でいけそうだということになる。

この90万kLがどのぐらいかというのは、13ページにある。

二酸化炭素の削減で150万t-CO₂であるが、長崎県の全家庭から出たのが160万トン、和歌山県の家庭が150万トンなので、大体その間ぐらいの量になる。これは別な観点から当時私はざっくり試算してみたところ、91万kLでどれぐらい発電できるかということを出して、逆に今度は太陽電池でどうかなとやってみると、340万kW相当になった。大体1軒で3キロとか3.5キロぐらいつるので、100万軒につけると同じぐらい。100万軒で、この当時ですとキロワットは50万ぐらいかかっていたので、1.5兆とか2兆とかになる。今は30万ぐらいに下がっているから、1兆円。当然、サマータイムを入れるとすると、切りかえなどシステム変更が起きるから、いろいろ手間暇がかかるので、金がかかるのだと言われた。それで計算したときには、たしか1,000億か2,000億円ぐらいの追加費用がかかるのではないかという試算を原さんなどと御一緒にして積み上げた覚えがある。それから考えても、太陽電池と比べたら随分よいではないかと話したが、その数字が表に出なかったのは、太陽電池の足を引っ張るようなことを言うなと言われ、この情報はあまり外に出せなかった。

しかし、このように見るとなかなか量だなという気がする。

14ページは、これは余興だが、今の和歌山県と長崎県のちょうど間ぐらいに来ると。このように並べると、やはり大都市圏は人口が多いので、家庭用でもこのように多くなるわけだが、サマータイム効果より下の県のCO₂発生量の県は多くある。人によってはこんな右端ではだめだと思って、左の分で払ったらいいか言う人もいるが、多分、実際の省エネ

効果というのは、このプラスアルファで乗ってくるのではないかと思うが、本当に計算できるところだけでやるとこういうことになる。

欧米諸国でどうかというのは、実はこちらのほうにいくつか書いてあるので紹介する。

例えば昔の日経のコラムにずっと連載していたものだが、中止になってしまった。今はもう絶版だが「『サマータイム制度』と日本-2」と書いてあるページで、英国は「日光節約法案」が発端。

2番目、観光振興が主目的だったイタリア。

3番目、「1日を2日分に使う」という発想で好評のドイツ。

これは一応、当時いろいろなところにヒアリングに行った。しかし、ヒアリングに行っても、当時はもう皆様サマータイムを入れて、それが日常の生活習慣の中に定着しているので、どのくらい省エネになったのかと言っても、今さら検証のしようがない。そのようなデータが残っているところは、何か数字を見せていただいたことがあるが、ほとんどいくら省エネでしたかという数字を聞くと、ちょっと待ってください、今はそういうのは計量していませんと言われたことを覚えている。

イタリアにヒアリングに行き、次にドイツに行ったのだが、イタリアとドイツが違うと思ったのは、イタリアは観光客がいっぱい来るので、明るい時間が増えると営業する時間が増えて、売り上げが伸びてよいと非常に喜んでいてのこと。

次にドイツに行ったら、ドイツは6時になったらぴたっと閉めるから、明るい時間は関係ない。イタリア人は何を言っているのだと言っていた。6時で全部店は閉めるのだと言われて、随分国民性が違うものだなと、日本はどちらなのだろうと。割とイタリアのほうに近いのではないかと思うが、そうすると今度はドイツ的な人が、労働時間が延びると言うので、結構大変かなという感じがする。

あとでお時間があるときに見ておいていただきたいのだが、最近の話題の中では、中国の話もここに出ていると思うし、韓国の話も出ていると思う。フランスあたりでやめようかという議論がちらほら出たりするように、時々出てくる。

1点、皆さんが懸念されることは、やはり1時間ずらすということは、そうはいつでも、切りかえのときには何らかの形で弱者に負担がかかるのではないかということかと思う。弱者というのは、お年寄りだとか、病人の方だとか、子供のこと。

当時、私たちがヒアリングをさせていただいた医師会の方々は、大丈夫ですとおっしゃったが、最近の方はそうではないらしくて、たまに反対の手紙が来る。影響が出るからだめだとおっしゃるが、人間の一日のリズムというのは、24時間プラスマイナスアルファなところで動いていて、毎日寝不足気味になる人もいれば、毎日の時間が十分だという人もいるぐらいずれる。よって、それを24時間で決めたこと自体が、実は本当は不自然である。24時間プラスマイナス1時間ということくらいで考えても大丈夫なので、1時間くらいだったら大丈夫ですよと、当時私たちが行ったときの医師会のお医者様がそうおっしゃっていたのだが、何でもサーカディアンリズムという人間の一日のリズムがあって、それで決

まっているのが崩れると若干影響があるけれども、その影響の度合いに幅があるので、そんなに気にしなくてもいいのではないのでしょうかと言われた。時間を決めてお薬を飲みなさいと言われていた人が、このようなことがあって何かずれたことによって影響がないわけではないかもしれないとか、子供たちはそう簡単には対応できないとか言われた。そう言われると何も言えないので、そうですかと言った覚えがある。最近はそのらの意見だけを書いていて、あなたまだサマータイムをやっているんだ、私たちは反対だからねと言われたら、何となく悪いことをしているような気になるが、そうではないのではないかと。

これをずっと二十年ちょっとやってきて、日本人というのは極めて変革ということを好まない。ところが、変えたら、今までの議論をころっと忘れて、すぐ行ってしまう。この辺がいかかなものだろうか。原子力の問題と一緒にするのはよくが、そういう意味で、今このサマータイム制度というのは、原子力があるからよいか悪いかと考えると、若干タイミングがよいかなどは思うが、本当はこういう制度は入れるべきではなからうかと思う。

つい最近、猪瀬知事が2時間ということ、ここでもお話しされたそうだが、すぐNHKが取材に来まして、省エネはどうでしょうかと言われた。省エネの話はしたのだが、テレビの放映はあちらで違う趣旨で流れたようだ。1時間でもずれたときに非常に早く開くというのは、プラス側のメリットとして、当時の御意見の中にもあった。経済関係の方に伺ったときには、そのようなメリットがありますよとおっしゃっていたが、2時間となると、思い切った御提案だなと思ったが、1時間だと、日本の場合にはそんなに大きな影響はないのではないかと思う。

説明を端折ったが、北海道の商工会議所と滋賀県に、実験的にサマータイムを試行していただいた。北海道全域でやってしまうということはあると思うが、部分的にやるということは、私は必ずしも賛成ではない。おそらく部分的にやると、もう賛否は極端に分かれてしまう。滋賀県でも、よかったという意見もあれば、非常に不便だったという意見もある。時間がダブルスタンダードになってしまうので、やるなら本当にきちんとやらなければいけない。

この時期になりますと、当時、原さんともたっぷり議論をしたが、4時半から明るいよなど。1時間でも早ければ、やはり涼しい時間帯に活動を開始できるので、やるべきではないかという話をしたが、なかなかうまくいっていない。

ぜひこの機会にもう一度御検討いただいて、ぜひ何らかの形でこのことができれば、また新しいリビングスタイルが生み出されるのではないかと思うので、ぜひよろしくお願ひしたい。

○八田座長 非常にいろいろなことがよくわかった。

○原委員 最後にお話しになった場所の限定という話は、それこそ20年前に議論したときには、東日本だけでもやったらいいのではないかと、あとは東日本だけだったら、むしろ夏と言わずに、通年で通してでもいいのではないかという議論があったことが記憶して

いる。

当時、そういった議論をするとすぐに出てきた話というのが、そのようなことをやったら大きな会社で本社から支店に電話をするときに時差があって仕事がしづらくなってしまおうとか、それは大変な混乱になってしまいますよということをよく言われた。それはこの20年の間にすっかり環境が変わって、それこそ国境を越えてビジネスをやっている人たちが当たり前にいるので、その要因は多分なくなったのだろうなという気はしている。

今、先生がおっしゃったダブルスタンダードになってしまうということは、一部の特定地域とか、あまりにも小さいところでやったら、そうなのだが、都道府県単位ぐらいであれば、あるいはもうちょっと小さくてもいいのかもしれない。一定のエリアであればあり得なくはないのかなという気もする。北海道でやっている擬似的なサマータイムなども踏まえて、エリアの範囲はどの程度でお考えか。

○中上氏 やはり、地方に行けば、大体県でクローズドで生活が成り立っているが、関東とか関西というのは広域圏になる。通勤がそのくらいまたがっているので、少なくともその辺はカバーするような領域でないと難しいかなと思う。

家を早く出たのに、時間が混乱するとなるので、四国だとか、あるいは小さいけれども、独立的にものが成り立っているような県を考えている。そのようなところだと可能性は十分あると思う。あらかじめそれでおっしゃるようにインプットしておけばよい。ただ、関東などの場合だと、広域圏全部で一緒に足並みをそろえないと、やはりちょっと混乱があるだろうなという気がする。

でも、ぜひやってみたいと思う。滋賀県がやりかけたのだが、やはり県庁だけでやった。そうするといろいろ毀誉褒貶があったようだ。

○原委員 北海道での反応は、必ずしもよく理解していないが、ネガティブな面とポジティブな面とどういう感じか。

○中上氏 ポジティブな面は、北海道は朝が早く明けるので、さわやかでよい。とにかくこれは北海道にとって非常によいではないかという話になった。ネガティブな面は、やはり御商売をやっていらっしゃる方が、場所によって時間が違ってしまうということがあるので、自分が同じグループで、同じところに属してやっていけばよいのだが、そうではない人たちが混在して生活しているので、やはり時間的なことで混乱が生じた。でも、その混乱がどの程度かというところまでは私はお聞きしなかったが、そのような程度と言えばその程度。

○原委員 それは時計の針を変えたのではなくて、擬似的にやって、関わっている人だけが帰るということをやったから生じたという、むしろそちらの混乱だったのかなと思う。

○中上氏 きっとそうだろう。時計までは多分変えさせていなかったはずだ。

よく出てくるので、牛の搾乳を朝早くしても、牛は時間が変わったから、サマータイムになったからといって、次からすぐに出ないぞと。それは困ると言われて、私も困ったなと思った。ドイツに言って聞いたら、1週間前から10分ずつずらしてありますよ、徐々に

1時間ぐらい何とかありますよという話があって、なるほどと思ったことがある。

それともう一つ面白かったのは、大分県にヒアリングをしたときに、高崎山のサルは、10時の開園と同時に出てくるように餌づけがしてあるそうで、1時間早くなると、お客さんが来てもサルが出てこない。これは困ると言われたので、それをはたと思い出して、前から餌を出してやれば来ますよと言って、そうかもしれませんねという話だったのだが、動物まで関わってくると、やはりなかなか大変かなという気がした。

○八田座長 それから、日本で1952年までやってサマータイムをやめたのは、私は小学校の4年生か5年生だったが、雰囲気としては、道も右左の右側通行、左側通行を占領が終わって変えたし、やはり非常にナショナルスティックな気持ちはあったと思う。サマータイムとか、いろいろな道路のあれとか、全部アメリカに押しつけられていたのだと。いなくなったのだから、もうよそうということがあったので、あまり実質的な議論をしたということではなかったのではないかと思う。

○中上氏 座長がおっしゃるとおり。

それでまた思い出したのだが、国会議員の方々にもアンケートをした。すると、この時代はまだ長老議員がいっぱい残っていて、皆さん経験されている。あまりいい経験がないものだから、あれはだめだと言って、若い人がやろうと思っても全然話にならなかった。それがだんだんリタイヤされて、若いほうに変わってくると、議員の方々の賛成度合いがずっと高まってきた。そういう傾向は確かに、当時経験されていた方は、あまりポジティブなイメージはない。

○八田座長 押しつけられたという感じだろう。

しかし、お話を伺っていると、いろいろな世論調査でも賛成が半分を超えているし、実質的に便利だから、外国にそろえて変えたほうが、よほど国際的な連絡が楽になる。いいことばかりだと思う。

これは日本全体では、やらない理由がないような感じがする。

問題は、東京だけでやることにどれだけのメリットがあるかだ。

それから、2時間というのは、あまり外国でも聞いたことがない例だ。やるなら全部最初から1年中2時間にずらしておいたほうがいいのかもわからない。

○中上氏 朝から暗いからとよくおっしゃるが、確かに暗い地域が出てきたりするケースが初めと終わりのころにあり得る。だから、皆さん方はそうだと思うが、パリなどに出張していると、冬などは9時でも暗いのである。まだ暗いからいいやと寝ていたら、時計を見たら9時で、これは会議に間に合わないということを経験したが、あのようなところで皆さん生活なさっていて、特段それだから不満だということはあまり聞いたことがない。

だから、やはり反対する方はそういうことでおっしゃるのだなど。反対することしか意見が出てこないから、賛成演説は全然してくれないから、矢面に立っていつも右往左往するので、ぜひ応援団になっていただきたい。

○八田座長 私も若い独身のころ、オハイオ州立大学で朝9時に教室に授業を教えに行っ

たら、その日の午前0時に夏時間になっていて、すでに10時だったため、大失敗したことがあった。しかし反対に変わるときはすごく余裕が出て、得した感じになる。

○中上氏 最初は、これも日本のあれから考えたら、ちょうどゴールデンウィークぐらいがいいのではないかといろいろあったのだが、やはり座長がおっしゃるように、国際的な慣行がある。飛行機の時刻表がそうだ。3月何日から変わるというのは、みんなそのようであって、だからあのようなことに合わせてほしい。だから、日本だけまた違うことをやられると困るのだという話があって、やはり国際的な調整も必要かなと思う。

○八田座長 どうもありがとうございました。